



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

前の晩冷蔵庫で作った冷茶を朝飲むときの幸せ。アガパンサスの大きな花が咲き始め、いよいよ夏の到来です。今年もグリーンカーテンが店舗や家庭でも多く見られ、エコ=夏の楽しみになってきた感があり当たり前になってきました。11回目を迎える銀座通り恒例の「街なみ再発見!展」。どんな作品に出会えるのか今年も楽しみな夏の風物詩です。7月の新九郎で、ゆっくりお楽しみください。

新九郎 7月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 7/3(水)~7/8(月) 第5回らくらくてん	人物、風景、イラスト等多彩な 13人のメンバーによる展覧会
 7/10(水)~7/15(月) 山崎優 油彩・水彩展	旺玄展受賞作品を中心に、四季 の風景画小品等を展示
 7/18(木)~7/22(月) 第11回街なみ再発見!展(銀座5画郎)	小田原の建物・街なみを描く 銀座通り アオキ、飛鳥、コトノ 倶楽部、ツノダ、新九郎で展示
 7/19(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
さあ、なつやすみ みんなあつまれ!! 2013 第16回夏休みこどもフェスティバル 受付先着順	7/24(水) 7/26(金) 7/31(水) 8/1(木) 8/2(金) 8/3(土) 申込先 伊勢治書店 0465-22-1366

会期・展覧会名	会場
7/11(木)~7/14(日) こみね展(相洋高校美術部)	アオキ画廊 1.2F 0465-22-0825
7/10(水)~7/15(月) 佐保田久美展	お堀端画廊 0465-23-7819
6/25(火)~7/7(日)月曜休館 若き画家たちからのメッセージ展	すどう美術館 0465-36-0740
7/16(火)~7/28(日) 心象への旅 元氏智子展	すどう美術館 0465-36-0740
6/15(水)~7/8(金) アートで庭園めぐり ART NOW 2013	松永記念館、小田原文学館、清閑亭 0465-22-2834
7/6(土)~7/15(月) 館野鴻絵本「ぎふちよう」原画展	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
7/19(金)~7/28(日) 小嶋伸・サチコ+MATANTE 展	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
7/1(月)~7/30(火)水定休 永井等絵画展	NARAYA CAFÉ GALLERY 0460-82-1259

ASHIGARAアートフェスティバル

自分の作品や活動をもっと多くの方にみてもらいたい、イベント運営をしてみたい、というメンバーを大募集します。
7月13日(土) 足柄上合庁 第二別館 特別室 3
 [第1部] 14:00~16:30 計画・企画案発表、意見交換
 会場移動とまち歩き→ソウセイカフェへ移動
 [第2部] 17:30~19:00 交流会(ソウセイカフェ)
 申込・問合せ ASHIGARA アートプロジェクト推進室 045-664-3731

小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康
 第6回「田中伯爵別邸の玄関」

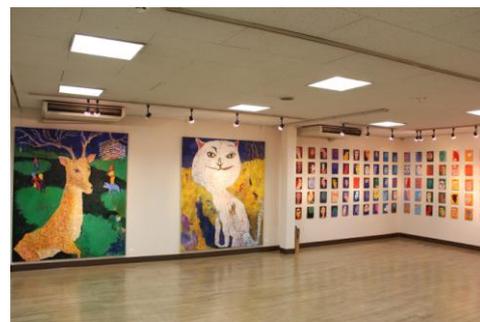


小田原城お濠端の藤棚から、南に向って足柄街道を歩くと閑静な住宅街に出る。昔、武家屋敷町であったと言う。街路樹の並ぶ道は、西海子(さいかち)小路、と標識に読める。道沿いに石組みの門が在った。

絵画同好会のスケッチ会で来て、この門を入った。中は庭で、緩い左カーヴのアプローチ路が続く。門からかなり離れたその奥に、白い洋風建築と玄関が見えて来た。張り出しにはアーチ型の暗い穴がぽっかりと空いている。庭も洋風であるが、松や桜、楓が植わっていて日本庭園の様にも見える。樹々の緑の隙間に、白い壁が輝いて眩しい。

この建物は、元宮内大臣田中光顕伯爵が別邸として建てた南欧風三階建て建築で、現在は、小田原文学館として使われており、文化財にも指定されている。

思うことなど 横井山 泰



新九郎での個展「射程」は無事に終了。ありがとうございます。

今回は設置場所に合わせてサイズ構図、色彩を考慮して作品を制作した。大作群と小品群とが対応する空間である。当初、小

品群はサムホール 100枚の予定であったが、アトリエで25列4段で並べてみると物足りなかった。大家さんの意見も「もう一段欲しいな〜」とのこと。僕も同じ事を思っていたので「よし!」と25人(枚)増やした。「迷ったらリスクを取りにいけ」という言葉をよく耳にするが、やってみればなんとかなるものだ。そして設置本番、バカ棒で印を着けていくと何かおかしい(?) 昨晚の綿密な計算は最初の数字が間違っていた。作業は八割方進んでいて泣きそうになったが、助っ人石塚さんが冷静に計算し直してくれた。キャパの大きな大人になりたいものです。なんとか初日を迎えて立川志らさんと笑福亭瓶二さんの落語会は大賑わいであった。お二人とも絶好調でみなさん笑って泣いた。「かわりめ、寝床、妾馬」続いてレセプションでは cafe 38(サンパ)の料理。遠方からのお客さんにも喜んで頂きました。市長はじめ小田原の方々にも徐々に作品が浸透してきたのかな? また、今回は友人のおかげで市内で面白い事やってる人々と繋がることができたので、近々僕も面白い事をやろうと思います。

庭に面した日当たりのいいアトリエには、100号の大作が何枚も立てかけられ、精力的にお仕事をされている様子が伝わってきた。山崎作品は、具象の風景画である。若々しいというのが第1印象だった。まるでVOCA展(40歳以下の新人作家現代アートの登龍門)を見ているような瑞々しい平面作品に目を奪われた。描きたいものが前面に出た具象だ。パステル調の色彩を多用し、自然から得た美をひたすら描いたかのような平面から、緻密さと明るさ、溢れるばかりの描く喜びがあふれていた。



山崎さんの画歴は長い。小学校のころから「絵は山崎に描かせろ」と言われてきたという。横浜国立大学学芸学部美術学科で学び、18歳で初めて出品した全日本学生油絵コンクールで初入選後、ハマ展、鎌倉美術展、新制作での入選を重ね、西相美術では、主な賞を総なめにし、1967年29歳で会員に推挙されるという経歴を持つ。

長年中学校で子供たちに絵を教える美術教師として「二足のわらじ」での作家生活である。給料をもらいながら絵を描くことができたことを、自分は恵まれていると振り返る。しかし、美術教師として絵画だけでなく、彫塑、工芸、デザインと幅広く教える為の学びも多く、教材研究や学校の仕事が多忙を極めた現場の時期は、全く描くことができなかったと振り返る。また、大変な年ごろの子供たちを相手に格闘した時期は絵を描くどころではなかったと懐かしむ。その頃の絵は今見ると全くだめだと厳しい。現場の最後は管理職として小学校に勤務した。このころから公募展(旺玄会)に出品を始めた。多忙な中でも、1973

年第1回目の個展(ツノダ画廊)を始め、1981年スタートした箱根風景画コンクールには20年間出品を続け最優秀賞、奨励賞など輝かしい受賞歴を持つ。そして今年7月10日から15日、第13回目の「山崎優 油彩・水彩展」を新九郎で開催する。

今回の個展は、描きつけてきた作品、特に近年の受賞作品を中心にした発表の場だ。仕事から解放され、今まで溜めてきたものを吐き出すように、ここ数年の精力的な仕事は、第48回神奈川旺玄賞、第75回旺玄展文部科学大臣賞、第50回記念展会員賞、損保ジャパン美術財団賞 第79回旺玄会奨励賞など大きな受賞となって還ってきている。

山崎さんの作品は、基本現場で生まれる。小品はすべて現場で仕上げるが、大作は写真に収めたり、スケッチしてから作品に起こすという。その現場へのこだわりは、執念ともいえるべき努力を通して出会っていたことに驚いた。ロコミでよい場所があると聞くと、綿密な準備をしてその場所に向かう。登山靴をはき、クマよけの鈴をつけ、雪の八海山を歩いたこともあるという。現場では、これという場所が見つかるまで、どこまででもひたすら歩いて探すのだという。5月に行った場所でも、秋の方がいい絵になると感じれば、秋に行つて作品にすることもあるのだという

受賞作「ふかみ」の現場には、往復4時間半歩いてやっと出会ったと顔が輝いた。3泊の予定で出向き最後の最後にびたつとした場所に出会った時は、ゾクゾクと興奮が走り小躍りして喜んだと笑顔が少年のように輝いた。「山崎ここで描け」と神様に導かれるようにして出会った場所は、まさに自分の目でなければ見つからない唯一の場所。山崎さんは、ここで「自分の歩むべき道」を見出し、確信したと自信をもってはっきりと話してくださった。

作品の輝くような明るさと画面から溢れる情感は、こうした作家の描く喜びにあふれた思いの表出なのかと、納得したお話であった。気づくと、かつて画面を占めていた空や雲は消え、自分の感動した描きたいものだけを描くようにな

ったと、近年の構図の変化を分析する。画面構成は自分の目を信じて自由に時に遊び心も加わったセンスある画面となって完成されている。

毎日午前中が仕事の時間だという。100号作品は、集中力のある昼前にびっちり描いて2、3か月はかかるという。仕事の手順も実に丁寧に、画面全体を一部分ずつぐるっと一巡し、さらに一巡と仕上げていく方法だ。仕上げには鏡に写したり、逆さにしたり、左右反転を繰り返して、最後の最後納得いくまで追求し完璧を期すという。絵に対する情熱のすごさを垣間見た気がした。また、どんな現場にも行ける体力作りにも余念がない。1日1時間は家の近くの酒匂川の散歩は欠かさない。スキーもまだまだ現役でされるという。70代とは思えないはつらつとした表情、元気な声、絵を語る姿は少年のように魅力的だ。

山崎さんは指導者として25年にわたって「絵好会」のご指導にもあたってきた。神奈川県に就職してきた若い世代を対象に青少年会館を会場に油絵を指導する会が始まりだ。現場出身のテンポある的確な指導が評判となり、20人の定員に対し3、40名の参加があり、講習を受けた人たちの希望で生まれたのが「絵好会」である。今では退職後の趣味で始める方が多いが、四半世紀の歴史を持つ会の主宰も、楽しみな活動になっている。

山崎さんには双子の弟で、これまた作家として活躍の「香川猛さん」がいる。弟である『香川猛』氏のことを山崎さんは「香川先生」と敬称で呼ばれた。山崎さんは中学校の現場、弟さんは高校で教鞭をとられ、共に画家としての道を歩まれてきた仲だ。香川さんにはずいぶん先を越された謙遜されるが、そこには切磋琢磨仕合ってきた仲間として、厳しくも同じ道を歩んできた兄弟として深い敬愛で結ばれているお二人がいた。これから少しでも香川先生に近づきたいとおっしゃる表情からは、描くことへのほとばしる情熱と、いつしか弟に近づき超えたいという画家としての姿勢と互いを引き出し合う見事な兄弟愛を見た気がした。

(新九郎友の会 木下和子)

六月のこと

六月の新九郎は企画展が続いた。

「アール・ド・ヴィーブル 自分らしく生きる」は障害を持った方たちの作品展。入場者数700名と大盛況であった。作品はためらいがなく、色彩が鮮やかでパワーがある。作品のポストカードや、絵を使ってデザインされた、ボールペン、一筆箋、カバーノート、ギフトセット等が大好評で、用意された商品すべて完売した。これで次の仕入れができる関係者は喜んでおられた。主催者の「ひよこあ」とぶるじえくとはアートにより作家が経済的に自立できるような活動を目指している。栄町のマルゲン商店、伊勢治書店でも取り扱われていて、デザインの新鮮さにひかれ手に取るお客様も多いと聞く。今回の展覧会の好評を受けて来年の開催も約束され、希望に満ちた第一回展となった。

「渋谷武美彫刻50年展」西相美術協会副会長の重責にある澁谷氏の50年の活動を紹介する貴重な展覧会であった。日展特選を二度受賞されている、今回は最初の受賞作品を始め、初期から最新作までほぼすべての年代にわたる26作品で構成され、氏の活動の全容を伺う事が出来た。日展特選の作品はさすがに素晴らしく会場を訪れる人々の目を奪った。帽子と手だけで素敵な女性を暗示させる作品は詩情があり独創的である。母子像、家族像は作家の温かな眼差しが感じられ、穏やかで平穩に生きることの幸せを感じさせる。このような作品は地域の重要な美術品として市に収集していただきたいものである。地域の美術は地域で大切にしなければならぬ。

早や七回目となる横井山泰展「射程」。毎回個展にタイトルをつける。深い思考と人間観察、洞察力は並みのものではない。今回の見どころはなんとといっても「大喜利」、人と動物の顔125枚を25列×5段の展示で目を引いた。SWS(サムホール)という小品だが、一堂に並べられた絵からパワーがみなぎる。動物も擬人化された顔であり、複雑で微妙な表情を湛えて見飽きない。ある人は「一度見ると中毒になり、また見たくなる。」と言っていた。一度見たら忘れられない印象の強い絵である。回を重ね、小田原の友人・知人も増え、会期終盤は「面白い」「すい」と話題になり、ロコミで来る若者が目に付いた。地域に根付いた作家としてこれからの活躍が益々楽しみである。④